後深草院と二条

――「伏見再会」の意味――

安田徳子
平野美樹

一、はじめに

『とはずがたり』巻四の終り近く、後深草院二条は、伏見で再会した後深草院から「いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。」等と諸国流浪の日々について尋ねられると、堰を切ったように自らの思いを語り出す。その内容は流浪の思いのみにとどまらず、「二歳にして母に別れ」た幼き日から、宮中での体験までをも含んでおり、極めて長大な「会話」として展開されている。二条の出家生活に疑念をぬぐいきれなかった後深草院も、連綿と続いた二条の強い言葉の後には「しばし物も仰せらるる事もなくて」と何の反論もなしえない。二条はこの再会で、後深草院に自らの出家の思いを強く訴えたのだと言えようが、作品中の一節として考えた場合、この部分は、二人の関係が、二条の「会話」によって、とらえ直されている部分と見る事ができるであろう。

二条にとっての（あるいは『とはずがたり』における）後深草院の存在については、これまで、一人の女性にとっての「男性」として、また「女房」にとっての「院」（王）として、巻五で描かれる葬送の場面まで、支配的な存在とする観点から言及されてきたようである。しかし、一方で、葬列を見失いながらもわざわざ「空しき煙の末」を見届けるに至るまでには、二条の中で、後深草院という人物、ひいては自らの宮廷生活をどう意味付けていくか、という葛藤があったらしいことも推測される。[注1] 巻四の「伏見再会」の場面は、その葛藤のありようを、二人の直接の「会話」として映し出したものと見

ることができるのではないか。本稿では、「伏見再会」の場面を基点としつつ、『とはずがたり』における後深草院の位置づけの変化を読み取り、そこに見られる、二条の出家および書くことに対する意味付けの変化を探っていくつもりである。

二、後深草院と二条の「会話」

後深草院と二条との関係についての記述は、「とはずがたり」の中では、院の「たのむの雁もわが方に」という『伊勢物語』十段の引用による言葉から始まっている。この言葉は院と二条の父雅忠の間の会話で発せられたもので、当の二条は「何事とはいかでか知らん」状態であったことが、その後の院との最初の夜の記述でも記されている。この夜と翌晩と、院は拒絶する二条に向って自分の思いを様々語り、多弁な姿を見せる。

こは何事ぞと思ふより、起き出でて去なんとす。起し給はで、いはけなかりし昔よりおぼしめしそめて、十とて四つの月日を待ち暮しつる、何くれ、すべて書き続くべき言の葉もなき程に仰せらるれども、耳にも入らず、ただ泣くよりほかの事なくて、人の御袂まで乾く所なく泣き濡らしぬれば、慰めわび給ひつつ、さすが情なくももてなし給はねども、「あまりにつれなくて年も隔て行くを、かかる便りにてだになど思ひ立ちて。今は、人もさとこそ知りぬらめに、かくつれなくてはいかがやむべき」と仰せらるれば、さればよ、人知らぬ夢にてだになくて、人にも知られて、一夜の夢のさむる間もなく物をや思はんなど案ぜらるるは、なほ心のありけるにやと、あさまし。「さらば、などやかかるべきぞとも承りて、大納言をもよく見せさせ給はざりける」と、「今は、人に顔を見すべきかは」と、口説きて泣きゐたれば、あまりに言ふ甲斐なげにおぼしめして、うち笑はせ給ふさへ、心憂く悲し。

夜もすがら、終に一言葉の御返事だに申さで、明けぬる音して、「還御は今朝にてはあるまじきにや」など言ふ音すれば、「ことあり顔なる朝帰りかな」とひとりごち給ひて、起き出で給ふとて、「あさましく思はずなるもてなしこそ、振分髪の昔の契りも、甲斐なき心地すれ。いたく人目あやしからぬやうにもてなしてこそ、よかるべけれ。あまりに埋もれたらば、人いかが思はん」など、かつは恨みまた慰め給へども、終に答へ申さざりしかば、「あな、力なのさまや」とて起き給ひて、御直衣など召して、「御車寄せよ」など言へば、大納言の音して、「御粥参らせ

らるるにや」と聞くも、また見るまじき人のやうに、

昨日は恋しき心地ぞする。(16)

院の言葉が「会話」として多く記されているだけでなく、引用を示す部分の記述（傍線部）も、それが記された以上に多弁であったことを示しているが、この後も、おおよそ二条との間では、常に院は「細やか」「さまざま」に多弁な人物として記述される。それぞれ長い「会話」を受けて、「さまざま承り尽すも」(20)「数々承るほどに」(20)、「など、また御文細やかにて」(23)、「など、さまざま仰せありて」(36)、「今宵はことさら細やかに語らひ給ひつつ」(58)、「いくらも仰せられて」「さまざま承れば」(142)、「尽きせずなだらかなる御言葉言ひ契り給ふ」(165)、「細やかに語らひ給ひつつ」(185)、「様々承りしほどに」(260)、と院は二条の前に常に雄弁な様を見せている。

このような院の多弁な様が際立つのは、最初の夜の記事を始めとして、二条との関係について改まって述べようとする部分である。

「人より先に見そめて、あまたの年を過ぎぬれば、何事につけてもなほざりならずおぼゆれども、何とやらん、わが心にも叶はぬ事のみにて、心の色の見えぬこそ、いと口惜しけれ。わが新枕は、故典侍大にしも習ひたりしかば、とにかくに人知れずおぼえしを、いまだ言ふ甲斐なき程の心地して、よろづ世の中つつましくて明け暮れしほどに、冬忠・雅忠などに主づかれて、暇をこそ人わろくうかがひしか。腹の中にありし折も、心もとなく、いつかいつかと、手の中なりしより、さばくりつけてありし」など、昔の旧事さへ言ひ知らせ給へば、(160)

これは、有明の月との関係を知った院がそれを容認して二条に語りかける部分であるが、院は誰よりもまず自分こそが彼女に対して関りが深いことを、二条の母典侍大との関りを持ち出しつつきわめて雄弁に語る。この直前には有明との関係について、院が「染殿后」などを「昔の例」に持ち出し、二条と有明をその例に準えた上で、有明の思いを受け入れるべきであると言葉多く「うち口説き仰せ」「ねんごろに仰せ」ている。また、この後、有明との関係の変化に応じて、院は執拗なほどに二条に向かって語る。最も長大なのは院が二条の懐妊を有明に知らせた後の部分で、「ありしあらましごとを、ついで作り出でて、よくこそ言ひ知らせたれ。いかなる父親・母親の心の闇といふとも、これほど心ざしあらじ」と始まる院の語りは、引用本文の行数では25行にも及び、二条は「いつよりもこまやか」な「御物語」として受け

止める。

一方、雄弁な院に対比されるかのように、院に向ける二条の言葉は少ない。それだけでなく、彼女は自分が黙っていることを度々意識しているように描かれている。先に掲げた最初の夜の記事でも、自分の沈黙を「終に一言葉の御返事だに申さで」「終に答へ申さざりしかば」（傍点部）と記していたが、他にも「御答へ申すべき心地もせず」（20）、「つゆの御答へも聞えさせぬほどに」（20）、「物も申さで」（142）、「なかなか言の葉なき」（163）、「また言の葉もなし」（168）、「何と申しやるべき言葉もなきに」（170）、「何と申すべき言の葉なき」（172）、「何と申すべき言の葉なくて候ふ」（203）、「何と申しやる方なきに」（261）、など、いずれも院の言葉に対して、言葉を発しない、あるいは発することのできない二条の意識が記されている。

更に二条の沈黙に関する記述の中では、院に対して言うべきことを心中に持っている時、あるいは実際に言葉を発した時であっても、それが院に向かっては言葉として機能しないことも度々意識されている。最初の夜では、二条はいくつか抗議の言葉を述べているが、多弁な院が二条の言葉には言葉で答えようとはせず、「言ふ甲斐なげ」に思って「うち笑はせ給ふ」と取り合わなかった。二条の言葉は院との「会話」の中では機能しないのである。前掲の最初の夜の記事でも、「口説きて泣きゐた」はずの二条の姿が「終に一言葉の御返事だに申さで」と記されてしまうのはそのためであろう。また、女楽の後、御所を出奔した二条を院が訪うてきた折、院の「さまざま」の仰せにも「物も申さでゐた」（142）二条は、「なべて憂き世を、かかるついでに思ひ遁れたく侍る由」だけは「申し」た。しかしこれに続く院の言葉は「嵯峨殿へなりつるが、思ひがけず、かくと聞きつるほどに、例の人づてにはまたいかがと思ひて」というものである。「かく」が指すのは二条の出家の意志ではなく、彼女がここに隠れ住んでいたことであり、院の言葉は二条の言葉を全く承けておらず、出家についてはこれ以上言及されないままに終っており、やはり二条の言葉は院に向かって機能していない。結果、二条は「さまざま承れば、例の心弱さは、御車に参りぬ。」と自らの「心弱さ」を持ち出して御所に戻ることになる。更に有明の月の子懐妊の折は、「（有明に　筆者注）申し知らせん」という院の言葉に

何と申しやる方なく、人の御心の中もさこそと思へども、「いな叶はじ」と申さんにつけても、なほも心を持ち顔ならんと、われながら憎きやうにやと思へ

ば、「何ともよきやうに御計らひ」と申しぬるよりほかは、また言の葉もなし。

と自問自答するような形で、表面上は何の異義もなく院の申し出を支持せざるを得なくなっている。

このような雄弁と寡黙の圧倒的な対比は、当然ながら「とはずがたり」において院が二条に対していかに支配的な存在として描かれているかを物語っている。関係の発端で院が父に言った「たのむの雁」が、二条自身の関知できぬ形で最初の夜へと展開したように、有明の月との関係、宮廷追放、出家後の八幡での再会に至るまで、一貫して二条と院の関係は、常に院の発する言葉によって定義付けられていく。このことは「とはずがたり」の研究史で取り上げられることの多い物語摂取の問題からもうかがわれる。院と二条の関係の場合にはしばしば院の方から物語世界が持ち出され、いつのまにか二条もそこへ引き込まれている[注3]わけだが、それはすなわち、二人の関係が、言葉を発して常に関係を定義付ける者と、その定義を受け入れる者とに固定されていたことを意味するのである[注4]。

三、伏見での「会話」

限なき月の影に、見しにもあらぬ御面影は、映るも曇る心地して、いまだ二葉にて明け暮れ御膝の下にありし昔より、今はと思ひ果てし世の事まで、数々承る。いづれもわが古事ながら、などかあはれも深からざらん。「憂き世の中に住まん限りは、さずがに愁ふる事のみこそあるらんに、などやかくとも言はで月日を過ぐす」など承るにも、かくて世に経る恨みのほかは、何事か思ひ侍らん。その嘆きこの思ひは、誰に愁へてか慰むべきと思へども、申し表すべき言の葉ならねば、つくづくと承りゐたるに、音羽の山の鹿の音は、涙をすすめ顔に聞え、即成院の暁の鐘は、明け行く空を知らせ顔なり。

鹿の音にまたうち添へて鐘の音の涙言問ふ暁の空心の中ばかりにてやみ侍りぬ。(275)

伏見で二条に再会した院は再度、二人の関係について多く語る。二条はやはり院の言葉を「数々承」り、自分の「言の葉」はならず、浮かんだ歌も「心の中ばかりにて」とめている。が、院が更に加えて二条の修行の旅について「いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。一人尋ねては、さりともいかがあらん。(中略)深く頼め、久しく契るよすがありけん。そのほか、またかやうの所々具しありく人も、なきにしもあらじ」と述べると、二条は突然「九重の霞の中を出でて、八重

立つ霧に踏み迷ひしよりこのかた、三界無安猶如火宅、一夜とどまるべき身にしあらねども、欲知過去因拙ければ、かかる憂き身を思ひ知る。一度絶えにし契り、二度結ぶべきにあらず。」から始めて、打って変わった雄弁さで語り出す。院の問いに答えて、訪れた数々の神仏にかけて不犯を誓った二条の言葉はそれだけではとどまらず、自らの過去へと言及して続く。

「…幼少の昔は、二歳にして母に別れて、面影を知らざる恨みを悲しみ、十五歳にして父を先立てし後は、その心ざしを偲び、恋慕懐旧の涙はいまだ袂を潤し侍る中に、わづかにいとけなく侍りし頃は、かたじけなう御まなじりをめぐらして憐愍の心ざし深くましましき。その御蔭に隠されて、父母に別れし恨みも、をさをさ慰み侍りき。やうやう人となりて、初めて恩眷を承りしかば、いかでかこれを重く思ひ奉らざるべき。拙き心の愚かなるは、畜生なり。それなほ四恩をば重くし侍る。いはんや、人倫の身として、いかでか御情を忘れ奉るべき。いはけなかりし昔は、月日の光にも過ぎてかたじけなく、盛りになりし古へは、父母の睦びよりもなつかしくおぼえましましき。思はざる外に別れ奉りて、いたづらに多くの年月を送り迎ふるにも、御幸・臨幸に参りあふ折々は、古へを思ふ涙も袂を潤し、叙位・除目を聞く、他の家の繁昌、傍輩の昇進を聞くたびに、心を傷ましめずといふ事なければ、さやうの妄念静まれば、涙をすすむるもよしなく侍る故、思ひをもやさまし侍るとて、あちこちさまよひ侍れば、或る時は僧坊にとどまり、或る時は男の中にまじはる。（以下略）（278）

引用本文で26行にも及ぶこの長い語りは以下旅の描写へと戻り、再び不犯を高らかに証言するが、自らの現状を述べるに当たって、母に死に別れた幼少から語り起こしている事は注目に値する。二条はこの中で院との関係を「父母に別れし恨み」「父母の睦び」と対比して述べ、院の「御情」は「恩眷」「四恩」と定義付けられるものとしている。このように父母と院とを対比し、院の情を「恩」と定義付けていくのは、彼女が自分の現状を院に説くのに際して、院との過去を語り直したい、語り直さねばならないという欲求・必要に迫られているからではないか。「二」で触れたように、宮中における二条の存在は常に院の「定義付け」によって示されてきた。院から出家者としての現在を問われた時、初めて二条は自分で自分を「定義付け」る機会を得た。自分がいかにしてここに、今の自分としてあるか、それは、御所の女房から

旅の尼となるに至るすべてを、自分の側から意味付けなければ語れないことであった。以前院は二条との関係について語る時、しばしば父母の縁から説き起こしていたが、この伏見での二条の語りは以前の院の語りに対応するように父母と院とを対比し、その上で院の情を「恩」と定義付ける。その「恩」を知った上で、宮廷世界に関して抱く「妄念」を静めながら、今出家者として我が身があると明言している。院と自分に関りのあったすべてを語り直す事は、言わば出家者としての自立を遂げていく事でもあった。院は二条の明言にも執拗に「都の事には誓ひがなきは、古き契りの中にも改めたるがあるにこそ」と誓いの空隙を突いてくるが、二条が更に明白に

「永らへじとこそ思ひ侍れども、いまだ四十にだに満ち侍らねば、行く末は知り侍らず。今日の月日の只今までは、古きにも新しきにも、さやうの事侍らず。もしいつはりにても申し侍らば、（中略）生涯無間の住みか消えせぬ身となり侍るべし」

と述べると、「しばし物も仰せらるる事もなくて」と沈黙する。この後院の発した言葉は二条の主張を反復するに過ぎないものとして書かれている。

二条の雄弁な語りが院を沈黙させ、更に二条の言葉が「会話」として院に作用するこの場面は、「二」で述べた「言葉を発して関係を定義付ける者と、その定義を受け入れる者」の関係が反転したものと言えよう。二条は、院が過去に与え続けてきた定義を、出家の身の現在の自分を語ることで再定義していく。二条の言葉は与えられてきた意味への主体的な「修正」表明であり、院を沈黙させた二条は、院、及び院と関ってきた自分の過去に対しての訣別をここで果そうとしているのである。

四、「清算」の旅

二年余前の石清水で、院との別れ際の二条の心中は、「さまざま承りて、いはけなかりし世の事まで数々仰せありつるさへ、さながら耳の底にとどまり、御面影は袖の涙に宿りて、御山を出で侍りて、都へと北へはうち向けども、わが魂はさながら御山にとどまりぬる心地」と記されていた。しかし、伏見での別れ際では、院の「必ず近き程に、今一度よ」の声を、二条は「あらざらん道のしるべ」――来世への道――と覚えたという。更にその後院から「まことしき御訪ひ」を賜った際、二条の心中は、

昔より何事も、うち絶えて、一目にもこはいかになどおぼゆる御もてなしもなく、これこそなど言ふべき思ひ出では侍らざりしかども、御心一つには、何

とやらん、あはれはかかる御気のせさせおはしましたりしぞかし、など、過ぎにし方も今さらにて、何となく忘れがたくぞ侍る。

と記されている。二年前とは異なり、現世での対面を最後と思い切った二条は、この記述の中で、「割り切れぬ」部分を抱えながらも自らの宮仕えに一つの意味を与え、[注5]院との過去を確認する。言い換えれば、伏見での再会がやはり一つの訣別であったことが確認されているのである。

伏見での再会が一つの訣別となったことは、以後の二条の旅の姿勢の変化へとつながっており、それはそのまま巻五の、巻四までとは異なる性格を表わすものとなっている。出家後の二条が衣を次々と手放していくことについては既に指摘のある所だが、[注6]手放すのは衣に限らない。また物の放棄に伴う意識は伏見再会以前（巻四）と以後（巻五）とでは随分異なっている。

①雲の上の御遊びも思ひやらるるに、御形見の御衣は、如法経の折御布施に大菩薩に参らせて、「今此に在り」とはおほえねども、鳳闕の雲の上忘れ奉らざれば、余香をば拝する心ざしも、深きに変らずぞおぼえし。（249）

②　月出でん暁までの形見ぞとなど同じくは契らざりけん

御肌なりしは、いかならん世までもと思ひて、残し置き奉るも、罪深き心ならんかし。（292）

この二ヶ所はいずれも院の形見の衣を布施に出した場面であるが、①では衣は院の御所を偲ぶよすがとされており、衣は手元にはなくとも、院への深い心ざしがあることが記されている。一方②では、「三つ」の御衣を、うち二つを布施に出して一つを残すなどして、これに執着している自分に「罪深き心」を感じている。「月出でん暁」は来世を意味し、歌によれば院の御衣は現世限りの形見でしかない。だからこそ布施として差し出し、放棄すべきもので、執着することは「罪深き心」なのである。同じく院の形見でありながら、①で前面に出されていた偲ぶ行為が②では「罪」とされる。二条は伏見以降、院との過去、ひいては自らの過去を、あえて断ち切っていこうとしている。それゆえ布施という形を取る物の放棄は、自らと過去とを繋ぐすべての「清算」とでも呼ぶべき行為として意味を持つようになるのである。世を捨てたことの意味を真に確認しはじめたとも言えるだろう。更にその行為は、院の形見の衣だけでなく、母の形見の「平手箱」、父の「硯」に及ぶ。この二品はそれまでは、旅の間は「人に預け、帰りては先づ取り寄せ」て、死ぬ

時にも持参するつもりだった物であり、いわば彼女の出自を確認する最後の物であった。それを放棄する事は出自高い都人であったという意識の放棄でもある。そのことと対応するかのように、二つの品は「母の形見は東へ下り、父のは西の海を指して」とそれぞれ京から流出していく。

物の放棄は、院の下にあった頃を偲ぶ縁となるすべての人との関係を「清算」する行為として、巻五を貫くものである。そうして次々と物を手放していった二条は、父の形見を手放した那智で、後深草院・父・遊義門院を夢に見、その夢想で一本の白扇を得る。「那智の御山の師」からその白扇を「千手の御体」と言われた二条は、「夢の御面影」を思いながら、院の最後の形見を那智に納め、白扇を「御形見」とする。言わば、白扇は「清算」行為のすべてを象徴する物となったのである。

二条は巻五の最後で、その白扇さえも手放している。ただ、その手放し方は、それまでとは少し異なり、自分でお布施に出すのではなく、那智の夢にも現れた人物である遊義門院への献上という形をとっている。二条はこの献上ですべての物を手放したことになったのだが、物の放棄が、後深草院と東二条院の娘である遊義門院への献上で締めくくられることには、いったいどういう意味があったのか。それを解明するためには、巻五に流れるもう一つの二条の「清算」行為を追ってみなければならない。

五、「終焉」への視線

巻五の後深草院の死の折、二条が裸足で葬送を追ったことはしばしば院への止み難い感情の現れとして取り上げられるが、ここでは後深草院の死に関する一連の出来事を追う二条の姿勢に注目したい。

十五夜、二条京極より参りて、入道殿をたづね申して、夢のやうに見参らする。(略)平中納言のゆかりある人、御葬送奉行と聞きしに、ゆかりある女房を知りたる事侍りしを尋ね行きて、「御棺を、遠なりとも、今一度見せ給へ」と申ししかども、叶ひがたき由申ししかば、思ひやる方なくて、いかなる隙にても、さりぬべきことやと思ふ。試みに女房の衣を被きて、日暮し御所にたたずめども、叶はぬに、既に御格子参る程になりて、御棺の入らせ給ひしやらん、御簾の透りより、やはらたたずみ寄りて、灯の光ばかり、さにやとおぼえさせおはしまししも、目も昏れ、心も惑ひて侍りしほどに、事なりぬとて、御車寄せ参らせて、既に出でさせおはしますに、持

明院殿の御所、門まで出でさせおはしまして、帰り入らせおはしますとて、御直衣の御袖にて御涙を払はせおはしましし御気色、さこそと悲しく見参らせて、やがて京極面より出でて、御車の尻に参るに、日暮し御所に候ひつるが、事なりぬとて御車の寄りしに、慌てて、履きたりし物もいづ方へか行きぬらん、裸足にて走り下りたるままにて参りしほどに、五条京極を西へやり廻すに、大路に立てたりし竹に、御車をやりかけて、御車の簾片方落ちぬべしとて、御車副上りて直し参らするほど、つくづくと見れば、山科中将入道、傍に立たれたり。墨染の袖もしぼるばかりなる気色、さこそと悲し。（略）空しく帰らんことの悲しさに、泣く泣く一人なほ参るほどに、夜の明けし程にや、事果てて、空しき煙の末ばかりを見参らせし心の中、今まで世に永らふるべしとや思ひけん。伏見殿の御所さまを見参らすれば、この春女院の御方御かくれの折は、二御方こそ御渡りありしに、このたびは、女院の御方ばかり渡らせおはしますらん御心の中、いかばかりかと推し量り参らするにも、（303—306）

二条は院の病状を知るや、実兼に頼み込んで院を「見参ら」し、崩御を聞くと御所へ参って人々の動きを見つめる。葬送に際しては棺を「見せ給へ」と頼み、御簾の隙間からうかがい、出棺の折は伏見院の御気色を「見参らせ」、葬送の車を「つくづくと見」る。更に葬送を見失った後、一人で煙の末を「見参らせ」、なお伏見殿の御所まで「見参ら」せて、遊義門院の心中を推し量って日を終える。院の死に対して、二条は執拗に「見る」事にこだわり、そのためにひたすら行動している。葬送を裸足で追うという一種異様な行為を支えているのは、その「見る」ことへの執着である。

巻五には後深草院だけでなく、東二条院の死も描かれている。その折も二条は御所の様子を「見参らせに参り」、人々の動きを見、「今はの御幸を見参ら」せている。自分を宮廷から追放する原因としても描いていた東二条院に対するこうした行動は、「見る」ことへの執拗なこだわりを抜きにしては考えられない。後深草院の葬送を、見失ってもなお煙の末を見、またわざわざ出向いてまで東二条院の葬送を見ようとする。二条を突き動かしていたのは、院、及び院の宮廷で自分が関わった人の終焉を見届けようとする意志だったと言えよう。死の記述ではないが、実兼について次のような部分があるのも注目される。

御弊の役を西園寺春宮権大夫つとめらるるにも、太

政入道殿の左衛門督など申しし頃の面影も通ひ給ふ心地して（323）

実兼については、「雪の曙」の呼称が消えた段階ですでに二条の過去との関りが希薄になっていたと考えられる所があり、院と同列には扱えない。が、入道した「実兼」に対しても、その昔の面影を次の世代に見出すことで、やはり終焉が見届けられているとも言えよう。

自分の過去を知る人々が次々と終焉を迎えていく。それを見届けることは、二条自身の終焉を認識する事でもある。伏見での院との訣別の後、二条は自分の過去を物の放棄という形で断ち切ってきた。物の放棄が自分と過去を繋ぐすべての「清算」であったように、自分の過去に関りのある人々について終焉を見届けることは、そうした人々への思いの放棄であり、やはり同様に「清算」行為であったのである。

そうして、物の放棄がそうであったように、「見る」こともすべて、遊義門院へと帰着していく。東二条院の死の折は、二条は遊義門院の御幸を見つめ、「数ならぬ身の思ひにも、比べられさせおはします心地し侍りしか」と思いを投影する。後深草院の時は、「このたびは、女院の御方ばかり渡らせおはしますらん御心の中、いかばかりかと推し量り参らするにも」と、東二条院崩御の事を重ね合わせながら、やはり遊義門院の心中を推し量っている。遊義門院への投影は、後深草院死後の天王寺参詣にも「一人思ひ続くるも悲しきにつけても、女院の御方の御思ひ、推し量り奉りて」とあり、その時詠まれた

春着てし霞の袖に秋霧のたち重ぬらん色ぞ悲しき

の歌は、重ねて喪服を着る事となった遊義門院を思いやり、独詠でありながら贈歌のような趣を見せている。

「見る」ことが終りとなるのは、後深草院の三回忌である。すでに形見の物を手放し尽していた二条は「よそながらも見参らせん」と「十五日のつとめて」に御影を拝す。翌十六日に至るまでのこの法要の一部始終を見届け、記した後、『とはずがたり』は跋文的記述で閉じられるのだが、その跋文の直前、記事としては最後の部分で、再び十五日のことが記される。

まことや、十五日は、もし僧などに賜びたき御事やとて、扇を参らせし包紙に、

思ひきや君が三年の秋の露まだ乾ぬ袖にかけんものとは

叙述上の日付を「まことや」と引き戻して、わざわざ付け加えたこの記事は、「四」で取り上げた、那智の夢想で得た白扇の献上を記した部分である。白扇を得た那智で、彼女は形見を手放し尽したのだが、その契機となっ

たのは、後深草院・父・遊義門院の三人を夢で「見た」ことであった。この夢の中で、院は「右の方へちと傾かせおはしましたるさま」で、父がその姿を「われらがやうなる無知の衆生を、多く後へ持たせ給ひて、これを憐みはぐくみ思し召す故」と説く。「十善の床を踏み」ながらも「御片端」の院、それを補佐し、二条に説く父、二条が伏見でこの世の「恩」と意味付けた二人の姿が夢となって具象化したと言えるだろう。巻五に流れる「見る」行為の最も象徴的な現れである。この夢に立ち会っているのが遊義門院で、遊義門院は夢の中で、衣を二つ取り出し、「二人の親の形見をうらうへやりし心ざし、忍びがたく思し召す。取り合せて賜ぶぞ」と二条に語りかける。この遊義門院の姿は、先に挙げた二条の「春着てし…」の歌に呼応するものとなっている。

このように、物の放棄と終焉を「見る」行為とがことごとく遊義門院と結び付いていくのはなぜか。それは遊義門院が二条の宮廷での時間を最も象徴する存在として、意識されていたからに他ならない。

『とはずがたり』において遊義門院の出生（東二条院の出産）が、史実として確認できるのとは異なる時期の事として記述されている事は既に指摘がある。意図的な虚構か作者の錯覚かはともかく、『とはずがたり』を見る限りでは、東二条院の出産の記述は、二条が後深草院と初めて関係を持ち、やがて「女御参りの儀式にもてなし」と中傷されて寵人としての立場を意識することになった記述の直後に位置している。御所を挙げての御産風景を「女の身を得る程にてはかくこそあらめ」と見る記述には、自身の、寵人とは言ってもその実一介の女房でしかない不安定な立場の始まりが対比されている。『とはずがたり』が書かれるにあたり、記述の対象となる宮廷生活（寵人であり女房である生活）の始発点のごく近くに、後深草院の子として生を受けた姫宮は、東二条院の娘であることも合わせて、二条の宮廷生活の象徴すべき人物であった。後深草院の忘れ形見で、清算すべき過去と深いつながりを持つ遊義門院は、巻五での「清算」に至って、同じ時代を生きた最後の生き残りとして二条の行為に立ち会うべき人として登場しているのである。

その遊義門院に白扇を託すことで、遂に二条の「清算」行為も終焉を迎える。過去を切り捨て、切り捨てていく行為自体も終わったことで、彼女はやっと「無」の境地へ入って行くことが可能となった。跋文的記述の前に、わざわざ日付を戻してまで白扇の行方が書かれることになったのは、この「清算」行為と、更にそれを書き

つづることが、そのまま出家・修行への志と重ねられているためである。「羨ましく」思った「西行が修行の式」を目指すためには、「かやうのいたづら事」――自らの過去とその「清算」行為――を書きつづり、切り捨てることが必要だった。最後の一文に「後の形見とまでは、おぼえ侍らぬ」とあるのは、まさに切り捨てることで出家の原点に立とうとする、真の意味で修行者となる決意の表れであろう。『とはずがたり』の終末、「後深草院二条」は真に一人の無名の修行者へと変貌を遂げたのである。

〔注〕

注1　福田秀一氏『新潮日本古典集成』解説。及び、岩佐美代子氏「問はず語り・表現衝動の内実」（『国文学』昭和五四・八）

注2　本文の引用は新潮日本古典集成による。（　）の数字は頁。

注3　安田徳子「『とはずがたり』の虚構――物語摂取を中心として――」（『名古屋大学文学部研究論集』昭和六二・三）

注4　このことは、例えば東二条院方から二条の処遇に対する抗議がなされた折に、それへの反論が、院が東二条院へ送った手紙の文面の形をとって掲出されていることなどとも関連していると思われる。

注5　岩佐氏、前掲注1に同じ。

注6　三田村雅子氏「『とはずがたり』の贈与と交換――メディアとしての衣裳――」（『新物語研究』一）平成五・一〇）

注7　出家後の二条が実兼と会った記事は、病床の後深草院を一目見るためにつてを求めた時の一度きりである。その時の記述では、実兼は一貫して「入道殿」であり、昔の「雪の曙」を思わせる描写や、愛人であったことを偲ばせる記述は何もない。「入道殿」は「昔の事、何くれ仰せられ」るが、それ以上の会話は展開される事もなく、二条の思いが披瀝されることもないまま、話題は後深草院へと移る。この記事の焦点は「今一度いかがしてとや申すと思ひては」と二条が一目後深草院を見ることを望むことへ合わされており、「雪の曙」としての実兼と二条との関係は、既に終焉を迎えていたと考えられる。

（付記）本稿の執筆は、安田・平野の『とはずがたり』輪読会における共同作業による。

（安田　聖徳学園岐阜教育大学
平野　名古屋大学大学院博士課程後期）